

黎明期の洋装とミシンについて

(第 1 報)

尾 中 明 代

緒 言

徳川幕府の末期に行われた鎖国から開国への大きな転換は、時勢の流れに伴い被服および被服工作の上にも徐々に変化をもたらした。外国文化の服装への影響は、女子の服装の洋装化より先に、男子の服装に洋風が採り入れられた。なかでも武士の服装は洋式調練を行うについて、従来の服装が改良され、洋装の形が採り入れられるようになったのであって、これをさきがけとした。当初、洋風化に対する幕府の禁忌、また攘夷論の唱えられる時勢下にあっては、種々抵抗があったが、しかし時代の要求は、軽装で動作の便利な洋装を採り入れようとする実用上の必要が次第に認識せられ、また一般においても洋服という新しいものへの好奇は、単なる排外意識によってとどめられるものではなかった。このような時に、遣米使節の帰朝によってミシンが初めてわが国にもたらされたのであった。文久2年に武士の服制改革があり、その後陸海軍が設置された。この時、雨露霜雪、また海水等にも丈夫な羊毛生地が重んぜられるようになって、ミシン裁縫が必要となり、開成所、慶応衣服仕立局、あるいは開拓使のミシン伝習生の募集となり、洋装とミシンが関連して服装文化発達への端緒をつくることとなるのである。幕末から明治の洋装化の跡をたどるについて、ミシンがどのような状況で日本に渡来したか、またミシン裁縫の発展ともなるべき初期洋装が、どのような推移をたどったかについて考察しようとするものである。

1 ミシンの初見

日本にミシンが渡来したのは万延元年(1860)遣米使節渡米のさいに持ち帰ったのが初めてのものである。徳川幕府は安政5年6月、日米通商仮条約に調印後、批准交換を行なうために外国奉行、新見豊前守を正使とし、同、村垣淡路守を副使として、使節一行81人をワシントンに派遣することとなり、一行はアメリカ軍艦ポーハタン(Powhatan)に乗艦して万延元年陰暦1月22日に横浜を出港し、3月9日にサンフランシスコに到着した。この時幕府の軍艦咸臨丸が、遣米使節の着岸見届けと航海練習のため先発している。鎖国令以来初めてのアメリカへの渡航であるから、彼我お互いの服装など珍しげな目をもって見ている様子が記録されている。1図は当時フランク・レスリー紙(Frank Leslie's Illustrated Newspaper)に掲載された、大統領ブカナン(J. Buchanan)との公式謁見の図であるが、この折の服装について、副使村垣淡路守の航海日記によれば、

「大統領謁見なれば けふをはれと とりどり支度せしが 豊前守正興狩衣鞘巻太刀 をのれ同じく毛抜形太刀 忠順鞘巻太刀 各烏帽子は萌黄の組掛糸鞋を用ゆ云々」と示されている。また彼の国の服装について、同じく日記によれば

「大統領は七十有余の老翁白髪穩和にして威厳もあり　されど商人と同じく黒羅紗の筒袖股引何の飾りもなく太刀もなし云々」と示されている。また彼の国の人がみた日本の服装については、使節らと同船したジョンストン中尉 (Lieut. James D. Johnston) の手記によれば

「数多の婦人より、余の同伴者は男子なりや或は女子なりや教えられよとせまられたれば余は、余の知るところにてまた余が信ずるところによれば、彼らは吾人が通常男子と呼ぶ階級に属する者なることを述べ、また余が説明の正確なることを信頼せらるべし、我々は60日間彼らと同船したるを以て彼らが如何に巧みなる変装術により女子なりと偽るも、余は之を看破することを得るのであると答えた」と記されている。



1 図



2 図

使節一行はワシントンのウィラードホテル (Willard Hotel) に約20日間ほど滞在しており、その間に彼らはミシンを見ている。2図はアメリカ婦人がミシンをかけているのを珍しげに見ている図であるが、このミシンは足踏みのウィラー・ウィルソンミシン (Wheeler & Wilson) と思われる。これは横引ミシンで、現在のミシンのように布を前方に進めるのではなく、横に引いてかけているのがみられる。このときはウィラー・ウィルソンミシンができてから9年後である。

またアメリカの家庭でミシンを見たおりの状況を記した随行者の日記をみると

「米人居家を通るに婦人予が輩を誘ふて縫室を見せしめたり。其器械の概略を挙げれば高さ三尺長さ一尺五六寸、幅一尺ばかりの台あり、台上縫具を設け台下に両足にて踏む可き鐙に似たる小鉄器あり、傍に鉄製のロクロの如き物を設けたり。縫人は其前に腰をかけ台上の針を運動せしめ縫ふ事尤迅速也云々」とある。このようにわざわざミシンを使ってみせたのは、やはり一般家庭ではまだ珍しかったからであろうと思われる。しかし当時アメリカの縫製工場では、既製衣服類の製造が盛んに行われており、種々の構造のミシンがすでに使用されていた。その市場の要求に応じ、ミシン製作工場も次第にニューヨークの近接地に移動し、シンガーはニューヨーク、ウィラー・ウィルソンはコネチカットのブリッジポート、グローバー・ベーカーはボストンに主工場を置いていた。この年すなわち1860年度のアメリカにおけるミシンの生産量は、上記各ミシン会社のほか、各州に散在する約40の小会社で製作されたものを含めて、11万1千台と示されている。その後1870年までにおける10年間の各会社の増産は著しく、次のような数字 (概数) がみられる。

1853年	Wheeler & Wilson	800台
1859年	Singer	3,000
1870年 (明治3年)	Singer	127,800

Wheeler & Wilson	83,200
Howe	75,200
Grober & Baker	57,400
Willcox & Gibbs	28,900

以上のようなのである。

使節一行がワシントンを出発して工業の盛んなフィラデルフィアに行き、ここで様々の物品を贈られた中に裁縫用のミシンも贈られ、日本に持ち帰ったことが前記ジョンストン中尉の記事の中に記されている。またサンフランシスコまで行った咸臨丸に通弁として乗艦していた中浜万次郎は、写真機と共にミシン一台を購入して、使節より先に持ち帰っている。サンフランシスコで購入したものと思われるが、これが日本にミシンが渡って来た最初のもといわれている。このミシンはのちに、芝日陰町の植村久五郎という人が購入したということを知者から聞いたのであるが、今このミシンは残ってはいないということであり、ミシンの名称も不明である。しかし当時日本にミシンが渡来しても、幕末の由々しい、しかも攘夷論の激しい世情であり、日本の服装界ではいまだそれを受け入れる段階には至っていなかった。

Ⅱ 当初のミシン

文久元年の芳員画、外国人衣服仕立之図をはじめ、同2年に出された横浜開港見聞誌によると、日本在留の外国人の間では、すでにミシンが使用されていたのが知られる。3図は西洋婦人が横引ミシンをかけている図であって、その中に次のような説明が書いてある。

「仕かけを以て巾をぬひ 物の図台の上にある二本の金工にて針を運び 下に一筋の糸有て足の先にて是を引く」

寛永16年の鎖国令以来、オランダと支那の二国のほかは他国との交易を断って幕末に及んだのであるが、当時一寒村にすぎなかった横浜は、開港ということになってから幕府は横浜移住を奨励し、内地の商人をはじめ、開港の年安政6年の秋には、イギリス人が海岸通り一番屋敷に木造の二階家を建築し、次第に移住商人の家屋も軒を並べるようになった。翌年2月には横浜に借地を出願した外国人の数は30名に達したといわれ、同年5月の調べでは、イギリス人18名、アメリカ人11名、オランダ人4名が移住しており、宣教師らも渡来して、この人たちのなかにはミシンを持ってきているものもあった。古老の話によれば、文久2年にブラウンという宣教師の夫人は、賃金の安い日本の職人でしかも手先の器用な足袋職人や袋物師らを雇い入れて、横浜本町通りに居留外国人を相手に婦人洋服店を出したということである。また文久年間



3 図

横浜の衛生組合長アメリカ人デヴィソンという人の夫人も、日本人の裁縫師を求めて洋服を仕立てさせている。このようにして洋服裁縫の技術は西洋婦人から伝習されたのが始めのようである。

Ⅲ 武士の服装とミシン

西洋文化の服装への影響はまず武士の服装の上にあらわれた。従来の武家装束はすでにこの時代の服装として不適當であり、洋式武術の砲術を訓練するには、筒袖の上衣に立附袴、あるいは細袴が次第に用いられるようになった。4図は咸臨丸に乗り組んだ指揮官、勝麟太郎の渡米直後の写真

であるがすでに活動に便利な筒袖の上衣に、そぎ袖羽織、細袴姿であり小刀を一振り帯び、麻裏草履をはいている。咸臨丸が往航のさい、非常な荒天続きで木綿の衣服がぬれ、そのため水夫らに発病者もでたのであるが、サンフランシスコに到着後、羅紗の上着と靴を支給されたということである。そのためこの航海で羅紗製の戎服がぜひ必要であることを体験したわけである。



4 図

文久2年の武家服制改革によって、訓練には戎服と称する筒袖、細袴が次第に用いられるようになり、地質も木綿に代って羅紗、呉縞などの毛織物が用いられるようになった。これら戎服着用の武士が現われるにつれて、服を修理する仕事も多くなって、足袋職人や仕立物職人、袋物師らは戎服裁縫を兼業したり、専業の職人に転業する者もあった。従って幕府でも慶応年間にはいつてから、横浜からミシンを仕入れることとなって、ミシン裁縫が次第に行われるようになるのである。

当時の戎服は形もあまりよいものではなかったもので、洋式の軍服を調製しようとしたのであるが、初めてのことで製作上次のように苦心したことが業界の古老の間に伝えられている。横浜の警備隊隊長の沼間（ぬまと読む）守一はフランス士官について兵術を学んだのであるが、軍服調製に当ってこの人が指揮をとり、当時横浜に駐在しているイギリスの小柄な軍人の古服を25両で購入し、これをほどいて型紙を作り、

足袋職人12名ほどを集めて製作したということで、日本人が洋服を作った始めであろうといわれている。

また慶応3年にオランダから帰朝した榎本武揚は、軍艦乗組員用の戎服を作るために、横浜から羅紗や、ミシンなどを大量に購入している。このようにミシンの必要が高まるとともにミシンが輸入されはじめ、その広告などもみられるようになった。慶応4年にドイツ人アープルヒが横引ミシンを輸入して、初めて横浜のインデラスト会社に陳列し、これを販売することになったが、1台の価格が80両（65ドル）ということである。ちなみに慶応3年6月の万国新聞に掲載された記事によれば、当時の洋服仕立代は次のような価格であった。

黒羅紗上着	14ドル～24ドルまで	白短かき上着	2ドル～25ドル
同袖無	4ドル	白麻股引	3ドル
同股引	7ドル～8ドルまで	白袖無	金縁の義は御好次第

横浜本町五十三 ラグージ とある。

また同年5月の万国新聞にミシンの図入り広告が掲載されたが、新聞広告として扱ったのはこれが最初であったようである。これには次のような説明がついている。

「此フロレンスといふ縫道具は、縫道具中最驚くべき者にして、此を用ゆるときは、一人にして凡数人の仕事にひとしく、たいてい半時の間に20間余を縫ふべし、そのうへ値段もいとやすく、此をつかふにはさまで手ぎわもいらずして、笹縁 衣服 鞋 鞍等の縫物にきはめて妙なるにより、横浜村にても往々この道具を用ゆるものあり、アメリカにおいては、此道具を用ゆる者甚多く、其数、千をもつてかぞふるなり。但しこれをおもに商内するところは、サンフランシスコのモントゴメリー通百十一番 ヒール といふみせなり」とある。

同じく慶応4年2月の中外新聞第1号の記事に次のような文がみられる。

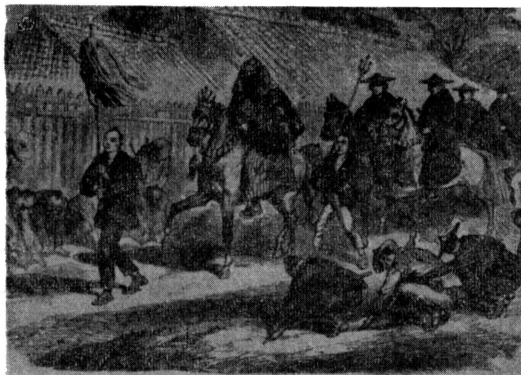
「西洋新式縫物器械伝習並に仕立物之事 右器械はシウイングマシンと名づくる精巧簡便の品にて、近年舶来ありと雖用法いまだ世に弘らず、依って去年官命を蒙り横浜に於て外国人より教授を受け、尚又海内利益の為に伝習相始め候間、望の御方は開成所へ御尋なさるべく候。付いては伝習の序何にても注文次第廉価にて仕立物致すべく候。依って此段布告に及ぶものなり。 慶応四年二月 開成所に於 遠藤辰三郎」とある。慶応4年2月は徳川慶喜が鳥羽伏見の戦に敗れ、のち江戸に帰った翌月であるが、こうしたおりにとも 開成所が、ミシン教授に力を尽したことがうかがわれる。このことは衣服縫製上の革新となり、日本においてのミシン発達の上にも大きい影響を与えたことと思われる。

Ⅳ 武装の洋装化

日本の洋装はまず武装の洋風化から始まっているが、その推移をたどってみると、文久元年正月には、江戸築地にある講武所の規模を拡大して洋式軍隊を設け、オランダ式の調練を始めたが、同年7月老中安藤対馬守信正の名において、大目付役坂井志摩は、調練の伝習生、軍艦乗組み御用方に対し、洋式服装の許しを与える旨を次のように布告している。

「異風之筒袖異様の冠物者 着用不相成趣兼而相触置候処近来密々着用致候族も有之哉之由如何之事に候 以後心得違無之様可致候 尤御軍艦方其外大船乗組の者 且武芸修業之者 筒袖に無之ては差支候には 船中又は稽古場を限 外国人之服に紛敷無之様仕立相用候儀不苦候 且又皮履之儀も御軍艦方等 船中を限り相用候儀は不苦 百姓町人共儀も職業柄商売体に依 筒袖着用雪中皮履相用候儀 是迄在来の品は不苦と雖 外国之製に紛敷相仕立候儀不相成候条 心得違無之様其筋々へ堅く可申付候」とある。

続いて文久2年閏8月には前述のように武家服制改革が行われ、上下(かみしも)に代って羽織袴が平服となった。また調練には立付袴のほか、細袴(段袋または陣股引ともいわれたもの)に、筒袖の上衣を着用して、これを戎服とも称した。この服装は幕兵ばかりでなく、諸藩の兵士の間にも広まっていった。5図は1864年3月(元治元年)の The Illustrated London News に掲載されたもので、外国人の目に映った日本の武士の服装であるが、筒袖、陣股引の姿が描かれている。6



5 図



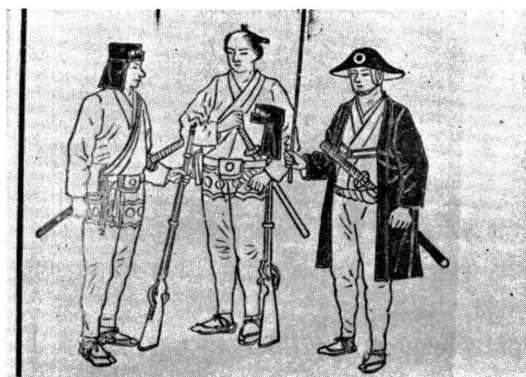
6 図

図は同じく4月の London News に掲載されたもので、立付袴をはいており陣羽織の前は穴かきでボタン留めになっている。

慶応2年7月には戎服が陸海軍の平服となり、これを西洋服とも称えられるようになった。そのほ

か、京都御所警備の場合に限り、火事具用として一般にも着用することが許され、次のような示達がなされた。

「筒袖陣羽織陣股引改称之達 筒袖陣羽織陣股引の儀者 戎服と相達置候処 以来そぎ袖羽織細袴と相唱 海陸軍役々之平服と相心得 其余者向々に而も出火等非常之飾者右服着用可被致候 但京都表にて着用火事具並本文之品柄紋所等有 最初右達候通可被心得候 右の趣万石以下の面々



7 図

ズといった。

8 図は、1866年6月の The Illustrated London News に掲載されたスケッチであるが、これには Modern costumes of Japanese officers と註があり、日本滞在の通信員による説明記事が次のようにのっている。「日本の士官たちは今急速にヨーロッパの衣服を採用している。そして数週のうちに大君（徳川将軍）自身も大将の正装をして、帽子は端を巻き上げた山形のものに羽飾りのある、正しい服装をしたのを見るようになると思う。すでに兵士たちは日本固有の袴をすててヨーロッパ風のズボン型のものを

をはいている。先日街で見た士官たち一行のスケッチをここに同封する。彼らの服装を、保守的な武士の服装と比べてその違いが見られるであろう。その武士はおどろきの目をもって若い同胞たちの洋風かぶれのくずれた服装を見詰めている。この中の若い男のひとりが白い蝶ネクタイをむすんで、気分よさそうにしている様子に気がつくであろう。そしてまた彼のパリーの collar、セービルロウ街ヘンリープール店の waistcoat と trousers そして極上の jack-boots を見るであろう。画を好む人にとって、その国固有の服装が、このように急速に失われてゆくことを見て一抹の哀愁を感じることはないであろうか。しかし私の次の通信で若い日本の進歩の姿をまたお知らせする」

後、明治3年10月には太政官から海軍はイギリス式、陸軍はフランス式を採用するよう布告があり、同年12月には海軍服の制定及び陸軍の徽章が制定され、4年5月には陸軍の軍服、軍帽等の制定があり、洋式の軍服が整うことになるのである。

V 男子の洋装



8 図

9図は徳川慶喜将軍がナポレオン三世から贈られた軍服を着用して、慶応3年に撮影した写真であるが、これは当時としては斬新な洋装姿であろうと思われる。しかしまだ一般には洋装はきわめて珍しい時代であった。

1867年(慶応3年)にフランスで万国博覧会が開かれるに際し、在日フランス公使レオン・ロッシュの勧めによって幕府は同博覧会に日本の文物を出品し、この時外国奉行向山隼人らを派遣するとともに、慶喜の弟徳川昭武がフランスに留学することになった。ナポレオン三世は昭武を日本の主権者の代表として扱い皇族待遇を以てした。このとき渋沢栄一は勘定格として一行に付き添って渡航しているが、外行準備のため京都で黒羽二重の小袖羽織に緞子の義経袴、靴などを調え、また横浜で大久保源蔵という人が購入してきた燕尾服型の上着を譲り受けた。一行28人は慶応3年正月11日にフランス郵船アルヘー号で離日したが、この洋服を着用していた栄一のみは優遇をうけなかったので不審に思ったところ、横浜で入手した洋服はホテルの給仕などが着る服であることを知らなかったためであったなどの話も残っている。



9 図

慶応3年に上梓された「西洋衣食住」という小冊子がある。これは福沢諭吉が、万延元年の条約批准交換の遣米使節、文久2年の開港開市延期交渉の遣欧使節、慶応3年の軍艦引取り交渉の遣米使節らに随行し、この3回の海外渡航によって見聞した外国の衣食住について片山淳之助に書かせたものであるといわれている。その「衣之部」には洋装について下着から上着、靴にいたるまで詳細な説明がなされ、脱ぎ着の仕方、ボタンのかけ方まで示されたもので、当時はこの新しい外国の服装について、正しい服の選び方、着方など一般がまったく不案内であったことがうかがえる。その解説をひろってみると、カラーについては、麻または紙製のものがあって、紙製は安価ではあるが一日で取り捨てるとあり、西洋服には必ずこのカラーをつけなければならない、これを用いないのは日本服でたとえれば、中衿のないじゅばんを着るようなものであると述べている。またコート類については、丈長で後裾に明きのある男子のコートを「ゼンツルマンコート、すなわち割羽織」背広型のものを「ビジネスコート、すなわち丸羽織」と訳し、次のような説明がしてある。割羽織は身分ある人の常服であり、丸羽織は職人などの着る衣服であるが、高貴の人でも自宅に居るとき、また外出のときなどには着ることがあり、また下人でも割羽織を着ることもあるので、つまり人々の好みによるのであるとして外見を飾る仏蘭西人などは割羽織を着る人が多く、亜米利加人、英吉利人等はすべて江戸っ子はだで衣服に構わず、じゅばんさえ清浄ならば上着は何にてもとんちやくすることなく、高貴の人でも丸羽織を着るものが少なくない。ただし海陸軍等の役人が改まった規式の場へ出るときは「ユニフォーム」といって、この割羽織にそれぞれの格式によって金銀の飾りを付けたものを着用するなどの説明がされており、洋装に対する一般への知識を広めようとしている。

Ⅶ 留学生と洋装

こうした時代にあって、幕末における洋装の先駆者は海外に留学した人々であろう。幕府は西洋学問の必要を認め、文久2年に洋学者西周、津田真道の兩人をオランダに3ヶ年間留学生として派

遣したのをはじめとして、そののち、英米仏蘭等への留学が引続いて行なわれている。

文久3年5月に伊藤俊輔（博文）、井上聞多（馨）、遠藤謹助、野村弥吉、山尾庸三の長州藩青年の5名が、藩主の命をうけて脱藩、ひそかに渡航し、イギリスに留学した。彼らはタイムズ新聞で長州藩の下関における外国船砲撃等、攘夷強行の情報を知り、伊藤、井上の両名は元治元年5、6月ごろに英国船で横浜に帰国した。この帰国に際して洋服を着用しているが幕末における形の整った洋装のはじめの姿であったろうと思われる。

海外への留学生は年を追って多くなり、慶応2年には幕臣の子弟でイギリスに留学するもの14名、そのころ諸藩からもアメリカ、イギリスに留学するもの数十名で、のち明治5年の調査では、米英仏



10図

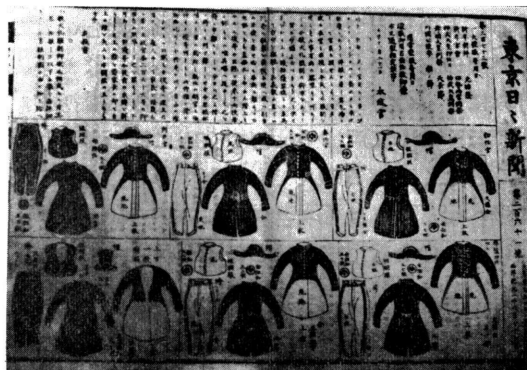
独露蘭清への留学生の数は380名余となっている。10図は、明治4年岩倉大使らの欧米派遣のときの写真である。安政5年幕府の締結した条約は、14年3ヶ月ののちに改訂することになっており、それが明治5年7月4日に当るので、これに先だち使節を諸外国に派遣して彼我の意見を交換することが必要であったので、併せて欧米の制度文物を調査する目的をもって、右大臣外務卿岩倉具視を全權大使とし、木戸孝允、大久保利通、伊藤博文、山口尚芳らを副使として、米英仏をはじめ13ヶ国を巡回させる予定で明治4年10月8日一行は離日して、まずワシ

トンに向かっているが、この写真はサンフランシスコで写した当時の洋装である。

Ⅶ 服制の改正と洋装の採用

海外諸国との交流が次第に繁く、いわゆる開化の時勢を迎えるにしたがい、欧米文化を輸入しようとする要求は、このように服装の上にも変化をきたしたが、一方国粋保存の要望もあり、欧化主義と保守主義と、その主張も区々であったので、明治元年6月、明治天皇は服制について、国民の公式礼服は、和洋いずれに定むべきかを諸臣に意見を求められている。太政大臣三条実美は宮中で重臣会議を開き、ようやく洋服採用が決定し、明治4年9月4日に次のような勅諭が出された。

「朕惟フニ風俗ナル者 移換以テ時ノ宜シキニ随ヒ 国体ナル者 不拔以テ其勢ヲ制ス 今衣冠ノ制 中古唐制ニ模倣セシヨリ流レテ軟弱ノ風ヲナス 朕太タ慨之 夫レ神州ノ武ヲ以テ治ムルヤ固ヨリ久シ 天子自ラ之カ元帥トナリ 衆庶以テ其風ヲ仰ク 神功征韓ノ如キ 決シテ今日ノ風姿ニアラス 豈一日モ軟弱ヲ以テ天下ニ示スヘケンヤ 朕今断然其服制ヲ更メ 其風俗ヲ一新シ祖宗以来尚武ノ国体ヲ立テント欲ス 汝近臣其レ朕カ意ヲ体セヨ」とあり、天皇の宮中に於ける儀式は古来の黄櫨染御袍、立纓の冠を正服とし、以下は束帯と規定され、明治4年11月12日に、大礼服、通常礼服を西洋服に改めることになったのであるが、当分の間新調の礼服



11図

を所持しない者は、直垂、上下（かみしも）の着用を許された。11図は明治6年1月13日の東京日日新聞に掲載された大礼服制御改正の図で、勅任官、奏任官、非役四位以上、同五位以下、上下一般礼服を示したものである。この大礼服着用日を次のように定められている。

新年朝拝 元始祭 新年宴会 伊勢両宮例祭 神武天皇即位日 神武天皇例祭 孝明天皇例祭 天長節 外国公使参朝の節 などの場合である。通常礼服着用の日は、参賀及び礼服御用召並任叙御礼の場合である。以上は明治5年11月21日の太政官布告による。

このようにして我国の服装に関する将来の方針も定まり、官服制が制定されたのである。

結 語

今日世界においてあらゆる種類のミシンが製作され、普及しているが、その発明の概略をふり返ってみると、1790年にイギリスのトーマス・セント (Thomas Saint) によって chain stitch のミシンで皮などを縫う程度のものが初めて考案されてから、幾多の研究と改良を経て、1830年にフランスのパーセレミー・シモニー (Barthelemy Thimonier) により、実用に供し得るミシンが作られるようになった。その後アメリカのオルター・ハント (Walter Hunt) またエリアス・ハウ (Elias Howe) によって lock stitch の原理が発明され、その後 1851 年には更に改良された Wheeler & Wilson Machine や Singer Machine なども製作された。わが国にミシンが初めて渡来したのは前述したように、1860年であったが、以後慶応、明治と社会の変化や産業の発達とともに、ミシンも次第に重要な役割を果たすようになって今日に至っている。

服装においても、遣米使節が初めてワシントンを訪れてのち、つづいて文久2年の訪欧、その後諸外国との交渉がしばしば行われ、服装も次第に外国のものを生活の中に採り入れる機会が多くなった。明治初年ともなれば、すでに洋装姿の帰朝者の写真なども見られ、この短い歳月のうちに外国文化を吸収し、文明開化の風潮は洋服着用者の漸増となり、服装の上にも進歩しつつあったことがみられる。

終りにあたり本研究調査について、貴重な資料を提供され御援助いただいた文部省史料館遠藤武博士はじめ、東京大学吉田常吉助教授、各ミシン会社の方々、また本学宮下孝雄科長、その他御助力下さった方々の御厚意に対し深甚の謝意を述べたいと存じます。

本研究の一部は昭和39年9月 第16回日本家政学会総会において発表した。

文 献

- 1 遣外使節日記 大塚武松編
- 2 遣米使節図録
- 3 南紀徳川史
- 4 徳川実記
- 5 嘉永明治年間録
- 6 幕末西洋文化と沼津兵学校 米山梅吉著
- 7 陸軍歴史 勝 海舟著
- 8 海軍歴史 勝 海舟著
- 9 横浜開港見聞誌 橋本玉蘭斉誌
- 10 西洋新書 瓜生政和編
- 11 西洋衣食住 片山淳之助著
- 12 世界文化史大系

東京家政大学研究紀要 第5集

- 13 近世錦絵世相史 浅井勇助著
- 14 講座日本風俗史被服篇 遠藤 武著
- 15 明治事物起源 石井研堂編
- 16 慶応義塾百年史
- 17 維新日誌
- 18 明治編年史
- 19 幕末明治新聞全集
- 20 The Illustrated London News